

うつせみ（樋口一葉）

(一)

家の間敷は三疊敷の玄關までを入れて五間、手狭なれども北南吹とほしの風入りよく、庭は廣々として植込の木立も茂ければ、夏の住居にうつてつけと見えて、場處も小石川の植物園にちかく物靜なれば、少しの不便を疵きずにして他には申旨むねのなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大凡おほよそ三月ごしにも成けれど、いまだに住人すみてのさだまらず、主なき門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき、家は何處までも奇麗にて見こみの好ければ、日のうちには二人三人の拜見をとて來るものも無きにはあらねど、敷金三分、家賃は三十日限りの取たてにて七圓五十錢といふに、夫れは下町の相場とて折かへして來るは無かりき、さるほどに此ほどの朝まだき四十に近かるべき年輩としじろの男、紡績織ゆかたの浴衣も少し色のさめたるを着て、至極そゞくざと落つき無きが差配のもとに來たりて此家の見たしといふ、案内して其處此處と戸棚の數などを見せてあるくに、其等のことは片耳にも入れて、唯四邊あたりの靜にさわやかなるを喜び、今日より直にお借り申ます、敷金は唯今置いて參りました、引越しは此夕暮、いかにも急速では御座りませんが直様掃除にかゝりたう御座りますとて、何の子細なく約束はとのひぬ、お職業はと問へば、いゝ別段これといふ物も御座りませぬとて至極曖昧の答へなり、御人數はと聞かれて、其何だか四五人の事も御座りまずし、七八人にも成りますし、始終とほしごたくし

て埒は御座りませぬといふ、妙な事のと思ひしが掃除のすみて日暮れがたに引移り來たりしは、相乗りの幌かけ車に姿をつゝみて、開きたる門を眞直に入りて玄關におろしければ、主は男とも女とも人には見えじと思ひしげなれど、乗り居たるは三十計の氣の利きし女中風と、今一人は十八か、九には未だと思はるゝやうの病美人、顔にも手足にも血の氣といふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼白きがいたましく見えて、折から世話やきに來て居たりし、差配が心に、此人これを先刻さきのそゞくざ男が妻とも妹とも受とられぬと思ひぬ。

荷物といふは大八に唯一くるま來たりしばかり、兩隣にお定め
の土産は配りけれども、家の内は引越らしき騒ぎもなく至極ひつそりとせし物なり。人數は彼のそゞくさに此女中と、他には御飯たきらしき肥大女ふとつうおよび、その夜に入りてより車を飛ばせて二人ほど來たりし人あり、一人は六十に近かるべき人品よき剃髮の老人、一人は妻なるべし對するほどの年輩としにてこれは實法じばふに小さき丸鬘まげをぞ結びける、病みたる人は來るよりやがて奥深に床を敷かせて、括り枕つむりに頭を落つかせけるが、夜もすがら枕近くにあるとせし老人二人の面おもてやう、何處やら寢顔に似た處のあるやうなるは、此娘このこの若しも父母にては無きか、彼のそゞくざ男を始めとして女中ども一同旦那さま御新造ごしんぞう様と言へば、應々おおいと返事して、男の名をば太吉々々と呼びて使ひぬ。

あくる朝風すゞしきほどに今一人車を乗りつけゝる人の有けり、紬つむぎの單衣ひとへに白ちりめんの帯を巻きて、鼻の下に薄ら鬚ひげのある三十位のでつぷりとして見だてよき人、小さき紙に川村太吉かはむらたきちと書て張りたるを讀みて此處こゝだくと車よりおりける、姿を見つけ

て、お、番町の旦那様とお三どんが眞先に襷をはづせば、そゝくさは飛出していやお早いお出、よく早速おわかりに成りましたな、昨日まで大塚にお置き申したので御座りますが何分最早、その何だか頻に嫌にお成りなされて何處へか行かう行かうと仰しやる、仕方が御座りませぬで漸とまあ此處をば見つけ出しまして御座りませぬ、御覽下さりませ一寸こうお庭も廣う御座りますし、四隣が遠うござりますので御氣分の爲にも良からうかと存じます、はい昨夜はよくお眠に成りましたが今朝ほどは又少しその、一寸御様子が変わつたやうで、ま、いらしつて御覽下さりませと先に立て案内をすれば、心配らしく髭をひねりて奥の座敷に通りぬ。

(二)

氣分すぐれて良き時は三歳児のやうに父母の膝に眠るか、白紙を切つて姉様のに餘念なく、物を問へばにこくと打笑みて唯はいくと意味もなき返事をする温順しさも、狂風一陣梢をうごかして来る氣の立つた折には、父様も母様も兄様も誰れも後生顔を見せて下さるな、とて物陰にひそんで泣く、聲は腸を絞り出すやうにて私が悪う御座りました、堪忍して堪忍してと繰返し、さながら目の前の何やらに向つて詫るやうに言ふかと思へば、今行まする、今行まする、私もお跡から参りまするとて日のうちには看護の暇をうかゞひて驅け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋を置き、きれ物とては一挺目にかゝらぬやうとの心配りも、危きは病ひのさする業かも、此纖弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乗りて驅け出す時には大の男二人が、りにても六つかしき

時の有ける。

本宅は三番町の何處やらにて表札を見ればむ、彼の人の家かと合點のゆくほどの身分、今さら此處には言はずもがな、名前の恥かしければ病院へ入れる事もせで、醫者は心安きを招き家は僕の太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月と同じ處に住へば見る物残らず嫌やに成りて、次第に病ひのつる事見る目も恐ろしきほど懐まじき事あり。

當主は養子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎きおもひやるべし、病ひにふしたるは櫻さく春の頃よりと聞くに、夫れよりの晝夜を合する間もなき心配に疲れて、老たる人はよろよろたよくと二人ながら力なさうの風情、娘が病ひの俄かに起りて私は最う歸りませぬとて驅け出すを見る折にも、あれく何うかして呉れ、太吉くと呼立るほかには何の能なく情なき體なり。

昨夜は夜もすがら靜に眠りて、今朝は誰れより一はな懸けに目を覺し、顔を洗ひ髪を撫でつけて着物もみづから氣に入りしを取出し、友仙の帯に緋ちりめんの帯あげも人手を借らずに手ばしこく締めたる姿、不圖見たる目には此様の病人とも思ひ寄るまじき美くしさ、兩親は見返りて今更に涕ぐみぬ、附そひの女が粥の膳を持來たりて召上りますかと問へば、嫌や嫌やと頭をふりて意氣地もなく母の膝へ寄りすがすが、今日は私の年季が明まするか、歸る事が出来るで御座んせうかと問ひかけるに、年季が明るといつて何處へ歸る簡、此處はお前さんの家では無いか、此ほかに行くところも無からうでは無いか、分らぬ事を言ふ物ではありませぬと叱られて、夫でも母様私は何處へか行くので御座りませう、

あれ彼處に迎ひの車が来て居ます、とて指さすを見れば軒端の
もちの木に大いなる蛛くもの巢のかゝりて、朝日にかゞやきて金色の
光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り来て、あれ彼んな事を、貴君お聞遊
しましたかと良人に向ひて忌はし氣にいひける、娘は俄に萎しぼれか
へりし面に生々とせし色を見せて、あの夫れ一昨年のお花見の時
ねと言ひ出す、何ぞと受けて聞けば學校の庭は奇麗でしたねへと
面しろさうに笑ふ、あの時貴君が下くだすつた花をね、私は今も本
の間へ入れてあります、奇麗な花でしたけれども最う萎れて仕
舞ました、貴君には彼れから以來御目にかゝらぬでは御座んせぬ
か、何故逢ひに来て下さらないの、何故歸つて来て下さらぬの、
もうお目にかゝる事は一生出来ぬので御座んするか、夫れは私が
惡う御座りました、私が悪いに相違ちがひござんせぬけれど、夫れは兄
様が、兄が、あゝ誰れにも濟ませぬ、私が惡う御座りました免し
て免してと胸を抱いて苦しさうに身を悶ゆれば、雪子や何も餘計
な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病氣なのだから、學
校も花もありはしない、兄様も此處にお出でなさつては居ないの
に、何か見えるやうに思ふのが病氣なのだから氣を落つけて舊もとの
雪子さんに成てお呉れ、よ、よ、氣が付きましたかへと脊を撫で
られて、母の膝の上ですゝり泣きの聲ひく、聞えぬ。

(三)

番町の旦那様お出と聞くより雪や兄様がお見舞に来て下された
と言へど、顔を横にして振向ふともせぬ無禮を、常ならば怒りも

すべき事なれど、ああ、捨て、置いて下さい、氣に逆らつてもな
らぬからとて義母ははが手づから與へられし皮蒲團を貰ひて、枕もと
を少し遠ざかり、吹く風を背にして柱の際に黙然として居る父に
向ひ、靜に一つ二つ詞を交へぬ。

番町の旦那といふは口數少なき人と見えて、時たま思ひ出した
やうにはたくと團扇うちわづかひするか、巻煙草の灰を拂つては又火
をつけて手に持て居る位なもの、絶えず尻目に雪子の方を眺めて
困つたものですなと言ふ計、あゝな事と知りましたら早くに方法
も有つたのでせうが今に成つては駟馬しめも及ばずです、植村も可愛
想な事でした、とて下を向いて歎息の聲を洩らすに、どうも何と
も、私は悉しつ皆世上の事に疎しな、母もあの通りの何であるので、
三方四方埒も無い事に成つてな、第一は此娘こねの氣が狭いからでは
あるが、否植村も氣が狭いからで、何うも此様な事になつて仕舞
つたで、私等わたくしども二人が實に其方に合はせる顔も無いやうな仕義でな、
然し雪をも可愛想と思つて遣つて呉れ、此様な身に成つても其方
への義理ばかり思つて情ない事を言ひ出し居る、多少教育も授け
てあるに狂氣するといふは如何にも恥かしい事で、此方から行く
と家の恥辱にも成る實に憎むべき奴ではあるが、情實を汲んでな、
これほどまで操といふものを取止めて置いただけ憐んで遣つて呉
れ、愚鈍ではあるが子供の時から是れといふ不出來しも無かつた
を思ふと何か残念の様にもあつて、誠の親馬鹿といふので有らう
が平癒なほらぬほどならば死ねとまでも諦がつきかねる物で、餘り昨
今忌はしい事を言はれると死期が近よつたかと取越し苦勞をやつ
てな、大塚の家には何か迎ひに来る物が有るなど、騒ぎをやるに
つけて母が詰らぬ易者などにでも見て貰つたか、愚な話ではあ

るが一月のうちに生命が危ふいとか言つたさうな、聞いて見ると
餘り心よくも無いに當人も頻と嫌がる様子なり、ま、引移りをす
るが宜からうとて此處を探させては來たが、いや何うも永持はあ
るまいと思はれる、殆毎日死ぬ死ぬと言て見る通り人間らしい色
艶もなし、食事も丁度一週間ばかり一粒も口へ入れる事が無いに、
夫ればかりでも身體の疲勞が甚しからうと思はれるので種々に異
見も言ふが、何うも病ひの故であらうか兎角に誰れの言ふ事も用
ひぬには困りはてる、醫者は例の安田が來るので斯う素人まかせ
では我まゝつので宜く有るまいと思はれる、私の病院へ入れる
事は不承知かと毎々聞かれるのであるが、夫れも何う有らうかと
母などは頻にいやがるので私も二の足を踏んで居る、無論病院へ
行けば自宅と違つて窮屈ではあらうが、何分此頃飛出しが始まつ
て、私などは勿論太吉と倉と二人ぐらゐの力では到底引とめられ
ぬ働きをやるからの、萬一井戸へでも懸られてはと思つて、無論
蓋はして有るが往來へ飛出されても難義至極なり、夫等を思ふと
入院させやうとも思ふが何か不憫らしくて心一つには定めかねる
て、其方に思ひ寄りも有らば言つて見て呉れとてくる／＼と刺たる
頭を撫で、思案に能はぬ風情、はあく／＼と聞居る人も詞は無くて
諸共に溜息なり。

娘は先刻の涙に身を揉みしかば、さらでもの疲れ甚しく、なよ
なよと母の膝へ寄添ひしまゝ眠れば、お倉お倉と呼んで附添ひの
女子と共に郡内の蒲團の上へ抱き上げて臥さするにはや正體も無
く夢に入るやうなり、兄といへるは靜に膝行寄りてさしのぞくに、
黒く多き髪の毛を最惜しげもなく引つめて、銀杏返しのはれた
るやうに折返し折返しに疊みこみたるが、大方横に成りて狼藉の

姿なれども、幽靈のやうに細く白き手を二つ重ねて枕のもとに投
出し、浴衣の胸少しあらはに成りて締めたる緋ぢりめんの帯あげ
の解けて帯より落かゝるもかしからで慘ましのさまなり。

枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折ふし硯々と呼び、書物よむ
とて有し學校のまねびをなせば、心にまかせて紙いたづらせよと
なり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙を手に取りて見れ
ば、怪しき書風に正體得しれぬ文字を書ちらして、是れが雪子の
手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに讀まれたるは村といふ字、
郎といふ字、あゝ植村録郎、植村録郎、よむに得堪へずして無
言にさし置きぬ。

(四)

今日は用なしの身なればとて兄は終日此處にありけり、氷を取
寄せて雪子の頭を冷す看護の女子に替りて、どれ少し私がつ
て見やうと無骨らしく手を出すに、恐れ入ます、お召物が濡れま
すと言ふを、いゝさ先させて見てくれろとて氷袋の口を開いて水
を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様が頭
を冷して下さるのですよとて、母の親心付れども何の事とも聞分
ぬと覺しく、目は見開きながら空を眺めて、あれ綺麗な蝶が蝶が
と言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄様兄様と聲を限りに
呼べば、こら何うした、蝶も何も居ない、兄は此處だから、殺し
はせぬから安心して、な、宜いか、見えるか、ゑ、見えるか、兄
だよ、正雄だよ、氣を取直して正氣になつて、お父さんやお母さ
んを安心させて呉れ、こら少し聞分けて呉れ、よ、お前が此様な

病氣になつてから、お父様もお母様も一晩もゆるりとお眠やすみに成つた事はない、お疲れなされてお瘦せなされて介抱して居て下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常は道理がよく了解する人では無いか、氣を静めて考へ直して呉れ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でも懇こまに吊とつて遣れば、お前が手づから香花かうはなでも手向ければ、彼れは快よく瞑する事が出来ると遺書にも有つたと言ふでは無いか、彼れは潔よく此世を思ひ切つたので、お前の事も合せて思ひ切つたので決して未練は残して居なかつたに、お前が此様に本心を取亂して御両親に歎をかけると言ふは解らぬでは無いか、彼れに對してお前の處置の無情であつたも彼れ決して恨んでは居なかつた、彼れは道理を知つて居る男であらう、な、左様であらう、校内一流の人だとお前も常に褒めたではないか、其人であるから決してお前を恨んで死ぬ、其様な事はある筈がない、憤りは世間に對してなので、既に其事は人も知つて居る事なり遺書によつて明かでは無いか、考へ直して正氣に成つて、其の後の事はお前の心に任せるから思ふまゝの世を経るが宜い、御両親のある事を忘れないで、御両親が何れほどお歎きなさるか考へて、氣を取直して呉れ、ゑ、宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今も直れるでは無いか、醫者にも及ばぬ、藥にも及ばぬ、心一つ居處をたしかにしてな、直つて呉れ、よ、よ、こら雪、宜いか、解つたかと言へば、唯うなづいて、はいはいと言ふ。

女子どもは何時しか枕もとを遠慮して四邊には父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覺えねども兄様兄様と小さき聲に呼べば、何か用かと氷袋を片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身體が痛くてと言ふ、夫れは何時も氣

の立つまゝに驅け出して大の男に捉へられるを、振はなすとて恐ろしい力を出せば定めし身も痛からうも處々に有るを、それでも身體の痛い知れるほどならばと果敢なき事をも両親は頼母しがりぬ。

お前の抱かれて居るは誰君、知れるかへと母親の間へば、言下に兄様で御座りませうと言ふ、左様わかれば最う子細はなし、今話して下された事覚えてかと言へば、知つて居ます、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同かほを見合せて情なき思ひなり。

良しやばしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き聲して、最う後生お願ひで御座ります、其事は言ふて下さりませぬ、其やうに仰せ下さりましても私にはお返事の致しやうが御座りませぬと言ひ出るに、何をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村さん、何處へお出遊ばすのと岸破と起きて、不意に驚く正雄の膝を突のけつ、椽の方へと驅け出すに、それとて一同ばらくと勝手より大吉おくらなど飛來るほどに左のみも行かず椽先の柱のもとにびたりと坐して、堪忍して下され、私が悪う御座りました、始めから私が悪う御座りました、貴君に悪い事は無い、私が、私が、申さないが悪う御座りました、兄と言ふては居りまするけれど、むせび泣きの聲聞え初めて斷續の言葉その事とも聞わき難く、半かゝげし軒ばの、風に音する夕ぐれ淋し。

(五)

雪子が繰かへす言の葉は昨日も今日も昨日も、二月の以前も

其前も、更に異なる事をば言はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給へと言ふ言葉、學校といひ、手紙といひ、我罪、おあとから行まする、戀しき君、さる詞をば次第なく並べて、身は此處に心はもぬけの壳かぶに成りたれば、人の言へるは聞分るよしも無く、樂しげに笑ふは無心の昔しを夢みてなるべく、胸を抱きて苦悶するは遣るかた無かりし當時のさまの再び現にあらはるゝなるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心なきお三どのの末まで嬢さまに罪ありとはいささかも言はざりき、黄八丈の袖の長き書生羽織めして、品のよき高髻にお根がけは櫻色を重ねたる白の丈長、平打の銀簪ぎんかん一つ淡泊あつさりと遊して學校がよひのお姿今も目に残りて、何時舊のやうに御平癒おなほりあそばすやらと心細し、植村さまも好いお方であつたものをとお倉の言へば、何があの色の黒い無骨らしきお方、學問はゑらからうとも何うで此方うちのお嬢さまが對にはならぬ、根つから私は褒めませぬとお三の力めば、夫れはお前が知らぬから其様な憎くていな事も言へるもの、三日交際つぎあひをしたら植村様のあと追ふて三途の川まで行きたくならう、番町の若旦那を悪いと言ふではなけれど、彼方とは質たちが違ふて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村様が何だと聞いた時にはお可愛想な事をと涙がこぼれたもの、お嬢さまの身に成つては愁うれらからうでは無いか、私やお前のやうなおつと來いならば事は無いけれど、不斷つゝしんでお出遊ばすだけ身にしみる事も深からう、彼の親切な優しい方を斯う言ふては悪いけれど若旦那さへ無かつたらお嬢さまも御病氣になるほどの心配は遊ばすまいに、左様いへば植村様が無かつたら天下泰平てんがに納まつたものを、

あゝ浮世は愁らしいものだね、何事も明すけに言ふて除ける事が出来ぬからとて、お倉はつくづく儘ならぬを傷みぬ。

つとめある身なれば正雄は日毎に訪ふ事もならず、三日おき、二日おきの夜なく車を柳のもとに乗りすてぬ、雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辭す時あり、稚子のやうに成りて正雄の膝を枕にして寐る時あり、誰が給仕にても箸をば取らずと我儘をいへれど、正雄に叱られて同じ膳の上に粥の湯をすゝる事もあり、癒つて呉れるか。癒ります。今日癒つて呉れ。今日癒ります。癒つて兄様のお袴を仕立て上げます、お召も縫ふて上げます。夫れはし早く癒つて縫ふて呉れと言へば、左様しましたらば植村様を呼んで下さるか、植村様に逢はして下さるか、む、逢はして遣る、呼んでも來る、はやく癒つて御両親に安心させて呉れ、宜いかと言へば、あゝ明日は癒りますと憚りもなく言ひけり。正しく言ひしを心頼みに有るまじき事とは思へども明日は日暮も待たず車を飛ばせ來るに、容體ことかく變りて何を言へども嫌々として人の顔をば見るを厭ひ、父母をも兄をも女子どもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬとて打泣くばかり、家の中をば廣き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼらせぬ。

俄かに暑氣つよく成し八月の中旬なかばより狂亂いたく募りて人をも物をも見分ちがたく、泣く聲は晝夜に絶えず、眠るといふ事ふつに無ければ落入たる眼に形相すさまじく此世の人とも覺えず成ぬ、看護の人も疲れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植村に逢ひしと言ひ、今日も植村に逢ひたりと言ふ、川一つ隔て、姿を見るばかり、霧の立おほふて臆氣なれども明日は明日はと言ひて又そ

のほかに物いはず。

いづぞは正氣にりて夢のさめたる如く、父様母様といふ折の有
りもやすと覺束なくも一日二日と待たれぬ、空蝉うつせみはからを見つゝ
もなぐさめつ、あはれ門なる柳に秋風のおと聞こえずもがな。

(明治二十八年八月二十七—三十一日「讀賣新聞」)